The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	巻頭言 ： 万博と健康長寿
Author(s)	佐藤, 眞一
Citation	生老病死の行動科学. 2019, 23, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73605
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

巻 頭 言

万博と健康長寿

World Expo and Healthy Longevity

佐　藤　眞　一

2025 年 5 月 3 日から 11 月 3 日の 185 日間にわたって、日本万国博覧会（大阪・関西）が、大阪の夢洲で開催されることが決定しました。大阪に暮らしていると、現時点では市民の気勢はもう一つという印象です。カジノ施設を含む IR（統合型リゾート）建設の跡地利用ということが、一般市民の感覚からは乖離しているからなのではないかと感じます。しかし、決定したことですから、私はポジティブ思考で楽しみに待つことにしました。あと 6 年後のことですから、私自身もすでに老年期に達しているため、未来志向のこのイベントに展示される技術の実用化を知ることはできないかもしれませんが、遠い未来を夢見ることは高齢者でも十分に楽しめるのではないでしょうか。

私たちの研究室は、1970 年の大阪万博の会場となった万博記念公園に隣接しているため、モノレールで通勤する私は、70 年万博のシンボルである太陽の塔をいつも眺めています。見るたびに想像力が掻き立てられる造形の神秘さに、今もって魅了され続けています。

70 年万博当時、私は中学 2 年生で、1 年繰り上げの修学旅行で会場を訪れました。終了に近い時期でしたから、観客はとても多く、アメリカ館やソ連館といった人気のパビリオンには近づくことさえできませんでした。あまり人気のないパビリオンを探しては見学していた記憶があります。私の手元には、お土産に買った各パビリオンのスタンプ付きの写真集があります。70 年万博を知らない若い学生や編集者などに見せると、興味津々の顔つきになります。それくらい、どのパビリオンも未来的な建造物なのです。そして、その写真集の表紙には「人類の進歩と調和」というテーマが印字されています。1970 年という時代には、これから先の未来には人類の進歩と調和が約束されているという、今考えれば無邪気な信念があったのだなあ、と思ったりもします。

最近のニュースでも、70 年万博で展示された無線電話や電気自動車、動く歩道などが、今は当たり前になった技術の最初のモデルだったと紹介されています。ケンタッキーフライドチキンが日本で最初に販売されたのも万博だそうです。

確かに数十年後の未来には、いくつもの技術が現実のものになって我々の元に現れています。しかし、例えば、携帯電話がスマートフォンになり、フェイスブックやインスタグラム、LINE などの SNS によって地理的距離を意識することなく、瞬時に情報が国境を超えて世界中の人々に共有されることで何が起きるかを想像できる人は、当時はいなかったのではないでしょうか。現代でも、そのような IT や AI の技術が今後の人類に何を起こすかわからないという不安感は、世界中の人々に共有されているように思います。

さて、2025 年の万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」、サブテーマは「多様で心身ともに健康な生き方」と「持続可能な社会・経済システム」です。人の生（human lives）に焦点を当て、個々人がその可能性を発揮できる生き方とそれを支える社会の在り方を、コンセプトである「未来社会の実験場」として提示するとのことです。実際に会場を訪

れる入場者のみならず、IT 技術によって世界中の人々がアイデアを交換することで、未来社会を「共創」することを目指しています。そして、人類共通の課題解決に向けて先端技術などの世界の英知を集めて、新たなアイデアを創造し、発信することを目標にしているとのことが公表されています。

こうしたテーマやサブテーマ、コンセプト作成の背景にあるのが、超高齢社会日本の未来の課題であり、その克服のポイントとして考えられているのが「健康長寿」なのです。むしろ「健康長寿」こそ日本がその解答を世界に示しうる課題であるとの認識が、テーマやサブテーマ、コンセプトよりも先にあったのかもしれません。

大阪での万博開催が決まる前の昨年の夏の期間に、大阪府は、万博のテーマに取り上げる予定の「健康」に関するワークショップを開催しました。本学医学系研究科の磯博康教授を座長として 5 回にわたって開催されたワークショップのうちの 1 回に私も話題提供者として参加しました。具体的には、都道県別の比較で低位にある大阪府の健康寿命を 10 年延ばすにはどうすれば良いかのアイデアを提供するというものでした。内容からいっても医学系、健康科学系の研究者の発言が多かったのですが、心理学者としては、健康度や寿命をアウトカムにするのではなく、幸福感などの心理変数をアウトカムにした方が、万博のテーマである「いのち輝く」に相応しいと思い、そのような発言をしました。

万博に関連しては、昨年 7 月 16 日にニューヨークの国連本部で開催された日本の万博誘致活動において、大阪大学からのパネル展示の一部として、私が代表を務める研究プロジェクトを紹介しました。そこでは、一般市民の死生観を傷病者や外国人をも含む多様な観点から検討するという、大阪府のワークショップとは異なる「いのち輝く」を示したつもりです。

地元・大阪で開催される万博ではどのような「いのち輝く」の課題が提示され、その解決策が「共創」されるのか、今からとても楽しみです。

さて、私ども臨床死生学・老年行動学研究分野は、柏木哲夫・初代教授によって 1993 年に創設され、本年で 25 年を迎えます。本号は、25 周年記念号として教員経験者や修了生から寄せられた原稿も掲載しています。

第二代教授を務められた藤田綾子先生からも記念の文章をいただく予定でした。しかし、藤田先生は、昨年 4 月 28 日にご逝去されました。一昨年からご体調がすぐれないとのことを先生からお聞きしていましたが、このように早く逝ってしまわれるとは夢にも思いませんでした。ただ、25 周年を無事に迎えられたことを、藤田先生にお知らせすることができたことは幸いだったと思っています。

藤田先生、どうかいつも、いつまでも私たちをお見守りください。

「生老病死の行動科学」第23巻をお届けします。インターネット上での公開もしていますので，そちらもご覧いただければ幸いです。

大阪大学学術情報庫 (OUKA)　http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/

また，当研究室のホームページからもご覧いただけます。

臨床死生学・老年行動学研究室　http://rinro.hus.osaka-u.ac.jp/